

ういろう
外郎売りの台詞

せっしゃおやかた 拙者親方と申すは、お立合たちあいのうち中に、御存知ごぞんじのお方かたもござりましょうが、お江戸たをえ発
って二十里にじゅうり上方かみがた、相州そうしゅう小田原おだわら、一色町いっしきまちをお過ぎあおもなされて、青物町のぼを登りへおいでな
さるれば、欄干橋虎屋藤右衛門らんかんばしとらやとうええもん、只今ただいまは剃髪ていはついた致して、円齋えんさいと名乗ります。元朝がんちょうよ
り大晦日おおつごもりまでお手に入れます此この薬は、昔むかし、ちんの国の唐人とうじん、外郎ういろうという人、わ
が朝ちょうへ来たり、帝みかどへ参内さんだいの折おりから、この薬を深くこめ置き、用ゆる時はいちりゅう一粒ずつ、
冠かんむりのすき間まより取り出す。依いってその名を帝みかどより、「透頂香とうちんこう」と賜たまわる。即ち文字すなわ
には「頂いただき、透すく、香におい」と書いて「とうちんこう」と申す。只今ただいまはこの薬、殊こと
の外ほか、世上せじょうに弘まり、方々ひろに似看板ほうばんを出し、イヤ小田原おだわらの、灰俵はいだわらの、さん俵だわらの、炭俵すみだわら
のと色々に申せども、平仮名ひらがなをもって「ういろう」と記せしは、親方円齋おやかたえんさいばかり。も
しやお立合たちあいのうち中に、熱海あたみか塔ノ沢とうのさわへ、湯治とうじにおいでなさるか、又は伊勢いせご参宮さんぐうの
折おりからは、必ずかどちが門違のぼいなされますな。お登りかたならば右の方、お下りなれば左側はつぼう。八方
が八やつ棟、表むねが三おもてつ棟、玉堂み造り、破風むねには菊ぎよくに桐どうづくの臺はふの御紋きくきりを御赦免とうごもんあつて、系図ごしゃめん
正しき薬でござる。

イヤ最前さいぜんより家名かめいの自慢じまんばかり申しても、御存知ごぞんじない方には、正身しょうしんの胡椒こしょうの丸香まるの
み、白川夜船しらかわよふね。さらば一粒いちりゅう食べかけて、その気味合きみあいをお目にかけましょう。先ず、
この薬を、かように一粒いちりゅう舌の上に乗せまして、腹内ふくないへ納めおさますと、イヤどうも云
えぬは、胃・心・肺・肝い・しん・はい・かんがすこやかになりて、薰風咽くんふうのんどより来たり、口中微涼こうちゅうびりょうを生しょう
ずるが如し。魚鳥ぎょちょう・茸きのこ・麵類めんるいの喰合くいあわせ、其の外そ、万病速効まんびょうそっこうあること神ごとの如し。さ
て、この薬、第一きみょうの奇妙せにには、舌のまわることが、銭独楽ぜにごまがはだしで逃げる、ひょっ

と舌がまわり出すと、矢も^や楯も^{たて}たまらぬじゃ。

そりゃそりゃ、そらそりゃ、まわってきたわ、まわってくるわ。アワヤ、咽^{のんど}サタ
ラナ舌^{した}に、カ牙^げサ^{しおん}齒音、ハマの二つは唇^{くちびる}の、軽重^{けいちよう}、開合^{かいごう}さわやかに、あかさたな
はまやらわ、おこそとのほもよろを。一つへぎへぎに、へぎほしはじかみ、盆豆^{ぼんまめ}・盆
米^{ごめ}・盆^{ぼん}ごぼう、摘蓼^{つみたで}摘豆^{つみまめ}、摘山椒^{つみざんしょう}。書写山^{しよしゃざん}の写僧^{しゃそうじよう}正。粉米^{こごめ}の生噛^{なまが}み、粉米^{こごめ}の生噛^{なまが}
み、こん粉米^{こごめ}のこ生噛^{なまが}み。縹子^{しゆす}・緋縹子^{ひじゆす}・縹子^{しゆす}・縹珍^{しゆちん}。親も嘉兵衛^{かへい}、子も嘉兵衛^{かへい}、親
嘉兵衛子^{かへいこ}嘉兵衛^{かへい}、子嘉兵衛親^{こかへいおや}嘉兵衛^{かへい}。ふる栗^{くり}の木^きの古切^{ふるきりぐち}口。雨合羽^{あまがつば}か、番合羽^{ばんがつば}か。貴様^{きさま}
の脚絆^{きゃはん}も皮脚絆^{かわぎゃはん}、我^{きやはん}が脚絆^{かわぎゃはん}も皮脚絆^{きやはん}。しっかわ袴^{ばかま}のしっぽころびを、三針針^{みはりはり}なが
にちょと縫^ぬうて、縫^ぬうてちょとぶんだせ。河原撫子^{かわらなでしこ}、野石竹^{のせきちく}。のら如来^{にょらい}、のら如来^{にょらい}、
三^みのら如来^{にょらい}に、六^むのら如来^{にょらい}。一寸先^{ちよっとさき}のお小仏^{こぼとけ}に、おけつまづきやるな。細^{ほそ}どぶに、泥鰌^{どじょ}
によろり。京^{きやう}のなま鱈^{たら}、奈良生^{ならなま}まな鰹^{かつお}、ちょと四五貫目^{しごかんめ}。お茶立^{ちや}ちょ、茶立^{ちや}ちょ、
ちゃつと立ちよ、茶立^{ちや}ちょ、青竹茶筌^{あおだけちやせん}で、お茶^{ちや}ちゃつと立ちや。

来るわ来るわ何が来る、高野^{こうや}の山のおこけら小僧^{たぬきひやつびき}。狸百匹^{はしひやくぜん}、箸百膳^{てんもくひやつばい}、天目百杯^{てんもくひやつばい}、
棒八百本^{ぼうはっぴやつぽん}。武具馬具^{ぶぐ}武具馬具^{ぶぐ}武具馬具^{ぶぐ}三武具馬具^{みぶぐ}武具馬具^{ぶぐ}、合わせて武具馬具^{ぶぐ}六武具馬具^{むぶぐ}武具馬具^{ぶぐ}。菊栗^{きくくり}・菊
栗^{くり}・三菊栗^{みきくくり}、合わせて菊栗^{きくくり}・六菊栗^{むきくくり}。麦ごみ・麦ごみ・三麦ごみ、合わせて麦ごみ・
六麦ごみ。あの長押し^{ながげ}の長薙刀^{ながなぎなた}は、誰^たが長薙刀^{ながなぎなた}ぞ。向うの胡麻殻^{むこ}は、荏^{ごま}の胡麻殻^{がら}か、
真胡麻殻^{まごまがら}か、あれこそほんの真胡麻殻^{まごまがら}。がらびいがらびい風車^{かざぐるま}、おきやがれこぼし、
おきやがれ小法師^{こほうし}、ゆんべもこぼして又こぼした。たあふぽぽ、たあふぽぽ、ちりか
ら、ちりから、つつたっぽ、たっぽたっぽ一丁^{いっちよう}だこ。落ちたら煮^くて喰^くお、煮^くても焼
いても喰^くわれぬものは、五徳^{ごとく}、鉄灸^{てつきゅう}・かな熊童子^{くまどうじ}に、石熊^{いしくま}、石持^{いしもち}・虎熊^{とらくま}・虎^{とら}きす。中^{なか}

にも、東寺^{とうじ}の羅生門^{らしょうもん}には、茨木童子^{いばらきどうじ}が、うで栗五合^{ぐりごんごう}つかんでおむしゃる。かの頼光^{らいこう}
の膝元^{ひざもと}去らず。

鮒^{ふな}・きんかん・椎茸^{しいたけ}・定めて後段^{ごだん}な、そば切り、そうめん、うどんか、愚鈍^{ぐどん}な小新発^{こしんぽ}
知。小棚^{ちこだな}の、こ下^{した}の、小桶^{こおけ}に、こ味噌^{みそ}が、こ有るぞ^あ、小杓子^{こしゃくし}、こ持って、こすくって、
こよこせ、おっと合点^{がてん}だ、心得^{こころえ}たんぼの川崎、神奈川、程ヶ谷^{ほどがや}、戸塚^{とつか}は、走って行け
ば、やいとを摺^すりむく、三里ばかりか、藤沢、平塚、大磯^{おおいそ}がしや、小磯^{こいそ}の宿^{しゆく}を、七
つ起きして、早天^{そうてん}早々^{そうそう}、相州^{そうしゅう}小田原^{おだわら}とうちんこう。隠れござらぬ貴賤^{きせん}群衆^{ぐんじゆ}の、花の
お江戸の花ういろ。あれあの花を見て、お心を、おやわらぎやという。産子^{うぶこ}・這子^{はうこ}
に至るまで、この外郎^{ういろう}の御評判^{ごひやうばん}、御存知^{ごぞんじ}ないとは申されまいまいつぶり。角出^{つのだ}せ、棒
出^だせ、ぼうぼう眉^{まゆ}に、白^{うす}・杵^{きね}・すりばち、ばちばちぐわらぐわらぐわらと、羽目^{はめ}をは
ずして今日^{こんにち}おいでの何れも様^{いず}に、上げねばならぬ、売らねばならぬと、息せい引っぱ
り、東方^{とうほう}世界の薬^{せかい}の元締め^{もとじ}、薬師^{やくし}如来^{によらい}も照覧^{しょうらん}あれと、ホホ敬^{うやま}って、ういろうは、い
らっしゃりませぬか。

※ 「外郎売り」を喋る目的の第一は滑舌の練習。早口は二の次。まずははっきりとした発音を心がける。

※ 台詞廻しの練習でもある。第一声から結びの一言まで、通行人の足を止めて薬を売ろうとしている一人の人物が喋る台詞であることを忘れない。聴く人が思わず薬を買いたくなるよう、明るくりズミカルにテンポ良く。